

CROSSING FOR

RESEARCH

Daito Bunka University Research Public Relations Magazine VOL.02



大東文化大学の
知の本質を探る





特別対談

大東文化の研究を語る

漢学振興と東西文化の融合による新しい文化の創造を目指して

開学した大東文化大学は、創立100周年を迎えました。今後の大東文化大学の研究推進について、

2023年より学長・副学長を務めるお二人にお話をいただきました。

高橋 進 学長

スポーツ・健康科学部 健康科学科(スポーツ科学)

1983年東京学芸大学教育学部初等教育教員養成課程保健体育専修卒業。
1985年同大学院教育学研究科保健体育専攻修士課程修了。都立高校教諭、
関東学園大学教授を経て2007年大東文化大学スポーツ・健康科学部健康科学
科教授。同大常任理事等を歴任、2023年4月より現職。

勝又 宏 副学長

スポーツ・健康科学部 スポーツ科学科(スポーツ運動学・運動制御学)

1988年早稲田大学教育学部体育学専修卒業。1994年順天堂大学大学院体育学研究科
コーチ学専攻修士課程修了。1997年～2002年The Pennsylvania State University
Department of Kinesiology 博士課程修了。首都大学東京客員教授等を経て2005年
大東文化大学スポーツ・健康科学部スポーツ科学科教授。2023年4月より現職。



専門種目を通じて研究の道へ

高橋 私は幼少の頃から柔道を修練してきました。大学では小学校教員を目指して養成課程で学び、大学院からは、後に武道必修化に関連することになる体育科教育上の課題点を社会心理学的手法で探究し、その結果に基づいて教育効果を高める授業を展開していく研究などを行ってきました。現在、文部科学省管轄下で行われている武道指導は、より楽しく安全に取り組めるように変化していますが、その基盤を構築し広めたのは我々の研究プロジェクトです。また、柔道の国際審判員として世界の体育研究者との関わりも深くなりましたので、オランダなど欧州のスポーツ教育をもう一つの柱として、現場に即した研究を実践してきました。

勝又 私の大学時代は高橋先生のように元々教員を目指していたわけではなく、競技者として野球に打ち込む日々でした。教職課程も履修しましたが、卒業後は一般企業に就職し、社会人経験を積んだ後に学び直そうと修士課程を受験したのです。まさか今のような管理職に就くとは想像もしていませんでした。以前からバッティングなど動作のメカニズムには興味を持っていたのですが、大学院で動作分析の手法を用いて研究するほどに、そうした興味を理論的に解明できる面白さを感じ、博士課程で運動制御学を深めようと留学しました。動作をコントロールするメカニズムを研究することで人間の動きの素晴らしさを追究したいと思ったのです。現在、運動制御学は脳科学、ロボット工学、コーチングなど多分野で応用されていますが、私はスポーツ科学に関連するテーマを基に授業やゼミを展開しています。

高橋 先生方の基礎研究が基盤となって、我々も教科教育を通じて生徒の運動能力を向上させることができます。お互いの研究は交差していますね。

学を楽しむ
領域を超えて交差する

高橋 多くの学部学科で多種多様な研究がなされている総合大学は恵まれた研究環境にあり、他分野の研究に目を向けると新たな驚きと発見が得られます。おそらく、今後は異なる領域を組み合わせることが次のステップになるでしょう。その足がかりは既にあり、最近もスポーツ科学科と書道学科のコラボレーションで書道の動作分析を行うという実験・検証を実施しました。私も実験に参加しましたが、とても面白く、学生もイキイキと取り組んでいます。このような人文社会学と生命科学をつないでいく取り組みはもっと増えていくといいと思っています。

勝又 「漢学・書道の学際的研究拠点の形成による『東洋人の“道”』研究教育の推進」をテーマとする全学プロジェクトの一環で行われた実験・検証でした。研究スタイルの違う我々から見ると、「そもそも書道の研究ってどう成り立つの?」といった素朴な疑問が生まれます。異分野の研究者同士が対話する機会があれば、その先に新しい発想が自然発生的に生まれるのだと思います。そのためにもゆとりが必要ですよ。多くの研究者は興味ある研究と、研究費や業績といったプレッシャーの狭間で葛藤を抱えていますから。のびのびとした本学の学風を活かしていけば、よりポテンシャルを引き出していけるのかもしれない。

高橋 総じて研究の場では、もっと丁寧に、もっと多くということが言われますが、「研究のための研究」にならないようにしたいですね。勝又先生も野球から発した興味がライフワークになっておられるし、私自身の研究も自分の「なぜ?」が教育現場で貢献できないかということが動機になりました。そして、さまざまな仮説を検証する過程の中で、知識の焼き直し起きてきます。おそらく、文理の学問系統を問わず、こうした探究の面白さこそ研究の醍醐味ではないかと思います。ワクワクしながら「学を楽しむ」という根本を忘れてはなりません。その点、柔軟な発想で思いもよらない研究テーマを選ぶ学生たちから、「知りたい」という純粋な動機に立ち返る重要性を常々学ばせています。

勝又 研究所や研究機関にはない大学の良さだと思うのはそういうところ。自分のライフワークができるだけでなく、それを教育の中で伝えることでこちらも新しい体験ができます。おそらくどの先生も自分の研究の面白さを

伝えたいと思って従事しておられると思います。大学の研究者である以上、少なくとも学生に、あるいは世の中に伝えようとする「発信力」が大切。実利に結びつくかどうかは別問題ですが、研究の意義を自ら発信することの重要性については、私たち研究に携わる者として自覚する必要があると思います。

高橋 研究を伝え残すことで社会を豊かにしていくのが大学の価値だとすれば、それは論文の数などの業績だけではありません。日々、研究者が自分の研究の価値を伝えていく努力が非常に大切ではないかと思っています。

多様な価値観を受け容れ
多文化を知に転換

高橋 今後、我々は研究推進を掲げるだけでなく、そのために何が必要なのかを的確に捉えて走っていかねばならないと思っています。物理的、時間的にゆとりを生む対策は数多考えられますし、精神的ゆとりという意味では、職場環境も含めて、全教職員一丸となってウェルビーイングの実現を目指します。

勝又 「健康経営」を掲げて全学で推進していく予定ですから、大学全体の健康度が上がり、ゆとりが生まれたときに、そのエネルギーを研究に注いでもらえればと考えています。研究者が意欲を持って前向きに研究することが大前提ですから、大学はそれを支援するものでありたい。研究費を獲得するためのサポートや運用上の事務的処理などを組織として適正に管理することで、安定した研究土壌が培われるのではないのでしょうか。

高橋 創立100周年のキャッチフレーズは「真ん中に文化がある。」です。伝統を残しつつ、多様な価値観を受け容れ、多文化の交差点を知に転換していくという本学の理念はこれからも不変です。まさに研究面で、そのような大学像を体現していくことを期待しています。





創立100周年記念共同研究座談会

大東文化大学創立100周年企画の一環として「多文化共生又は社会における多様性に関する総合研究」共同研究会が活動しています。ご参加の先生方に思いをお話いただきました。

「多文化共生」と 背景にある差別や常識を考える

山口 本研究会は、大学100周年に関連して、学部・学科・研究領域を超えて集まった総合研究チームです。当初の目標は「若手賞」選考とシンポジウム開催※、そして論集の作成でしたが、研究会の中で自然発生的に生まれる話題からも本学の多文化共生の進展について様々な課題が見えてきました。そこで、思いを自由に語り合う場として座談会を設けました。

金 少子高齢化に伴い経済パラダイムなどが転換される中、今後、日本の社会システムを維持していくために外国人などバックグラウンドを持つ人々とうどう協力しながら仕事をするのが課題になっていますが、この際、重要なキーワードが「多文化共生」だと考えています。ジェンダー、国籍、宗教など様々な要素が含まれますが、多様な人材と一緒に育てていく現場として大東文化大学の現状を考えなければいけないし、外国人の視点から一緒に議論し、共感し合いながら、次のステップにつなげていければと思います。

ミヤ 私はインドネシア出身で、多文化共生は私の実体験でもあり、日本の大学も異文化出身者にもっと優しい環境になればと思って参加しました。この研究会はまず課題が出てくる場と考えていて、これから私自身の研究でも、大学の運営でも、取り入れられるものから始めたらどうかと思っています。多学部・学科から集まった先生方の意見やアイデアから出発して、ポジティブな影響が生まれればと期待しています。

金 例えば個人と個人の間でトラブルが起きたとき、「自分は差別するつもりではなかったから、悪気がなければ問題ない」という論理ではすぐ解決しにくいんです。その人が持つ背景や文化から俯瞰的に見れば「こういう行動は何を意味しているか」「今は差別的な考え方が広がっている」というような傾向が見えてくるはずなんですよね。問題を共有していく段階でも皆が共通意識を持てば、少しずつ良い方向へと変えていくことができると思います。

吉永 私はこの研究プロジェクトにあたり、民法学者である穂積重遠の家族観について調べています。穂積は女性団体が示した花柳病罹患

男性の結婚拒否の請願書に関わっていました。また、重い精神病に患っている配偶者と離婚が許されるかといった議論があり、穂積は離婚を認めるという考えを持っていました。上の二つの問題に「優生学」の視点を加え、穂積の家族観を分析し、現代の差別問題に通じる思想とつなげられたら良いな、と考えています。

生駒 善意が悪意にあつという間に転じてしまう問題は、19世紀アメリカ文学にも表れることがあります。例えば私の研究するマーク・トウェインの作品の中には、優しく愛情深いと言われる人物が、事故で死んだのが白人じゃなくて黒人でよかったと何の悪意もなく語る場面があります。当時の黒人奴隷は所有物だから同情には値しないという記述を読むにつけ、善意や悪意というものが環境や教育によっていかようにも変わっていくのだと考えさせられます。それは差別の問題にもつながると思いますが、善意や悪意、何が常識で何が非常識なのかといったことを見直すために、この研究会が寄与すると思います。それは多文化共生という考え方にもつながってくるのではないのでしょうか。 ※P05参照

研究と教育の融合をめざして

周東 私は大東文化大学の「文化」につながる文化社会学が専門ですが、1918年にいわゆるカルチャーという意味での文化という概念が日本に紹介されてから100年と少し経ちました。今、多文化共生という理念はおそらく多くの方が共有できるのですが、耳障りのいい言葉をいざ実践していくのは大変なことであり、どうしても大きい声を通りやすいし、共生と一言言ってもそう簡単ではないというところも考えたいと思います。

松田 多文化共生という理念があったとして、そこには非対称な権力関係、ジェンダー差別、民族差別、障害差別など、互いに話せばわかり合える、ではすまされない現象がたくさん存在します。既存の社会の仕組みが多文化共生を許さないところもあるということも射程に入れながら、では人が暴力を振るわずに、振るわれずに、健康で文化的な生活ができるためにはどうすればいいのか。それを考えていくことに、おそ

らく意味があります。シンポジウムの「帝国」や「ジェンダー」というテーマは、そうした既存の社会を歴史的に振り返るものでもあると思います。

春日 スポーツ史研究の立場からは、日本のスポーツというものが東洋文化の融合の結果、生まれたものとも言えます。スポーツ科学研究は学際的で、学科には自然科学が専門の教員が多いので、私の研究方法は他学部の先生の方が近いこともあります。学部の教育活動だけではわからなかった「違い」のようなものへの気づきから得たものを学内に還元できたらと思います。

井上 私は国際関係学を専攻していますが、文化間の交流を理解するには、背景にある権力関係が大切だと思っています。例えば、国際的な民主化支援といった文脈でも、支援される側の文化は対等には扱われません。対等に扱われない文化や意見に耳を傾け、なぜそれが大事なのかを考えていくことは、受ける側のニーズにより合致した支援を見出すという意味でも、より

民主的で対話に開かれた社会を作るという意味でも、大切なのだと思います。遠い国の国際文化交流を見ながら、私たちの生活に活かせる問題を探っていききたいと思います。研究会を通じて専門分野を異にする先生方と互いの問題意識を共有することで、自分自身が鈍感になってしまっている部分に立ち返り、改めて多様性を持った社会を形作る一員となっていきたくと思っています。

周東 こうした議論の場では、知のある運動として、ある正しさに向かって提言していくことと同時に、それを実際に組織や社会の中に活かしていく際にはコンフリクトが生じ得ます。どのように折り合いをつけて橋渡ししていくのが問われているのではないのでしょうか。

山口 多角的な視野が得られる、たいへん刺激的な研究会だと感じています。自分たちの研究のみならず教育の場でも多文化共生がどう実践されていくかということ、これも非常に大事な視点ですので、研究と教育との融合をめざして、よい議論ができるものと期待しております。



山口 みどり教授
社会学部 社会学科(イギリスジェンダー史・社会史)

2001年英国国立エセックス大学社会学部大学院博士課程修了。2002～04年日本学術振興会特別研究員。2010年ロンドン大学歴史学研究所客員研究員。大東文化大学社会学部法律学科専任講師、准教授、教授を経て2018年より現職。



金 美珍准教授
国際関係学部 国際関係学科(社会政策・社会学)

2009年上智大学グローバル・スタディーズ研究科グローバル社会専攻修士課程修了。2016年一橋大学社会学研究科総合社会科学専攻博士課程修了。東京農業大学、浦和大学、専修大学、法政大学、中央大学非常勤講師を経て2021年より現職。



ミヤ・ドウイ・ロスティカ講師
国際関係学部 国際関係学科(東南アジア地域研究・インドネシア政治)

2007年国士舘大学大学院政治学専攻政治学専攻修士課程修了。2013年同博士課程単位取得満期退学。2016年国士舘大学大学院博士(政治学)学位取得。2015年大東文化大学国際関係学部非常勤講師。放送大学、警察大学校、亜細亜大学、神奈川大学を経て2019年より現職。



吉永 圭教授
法学部 法律学科(法哲学・法思想史)

2003年東京大学法学部卒業。同大学院法学政治学専攻研究科助手。2008年立教大学法学部助教。2010年大東文化大学法学部法律学科専任講師。立教大学兼任講師、大東文化大学准教授を経て2018年より現職。筑波大学法科大学院非常勤講師。



生駒 久美准教授
東京都立大学 人文社会学部 人文学科(アメリカ文学・文化)

2018年オクラホマ大学大学院博士課程修了(フルブライト奨学生)。2014年大東文化大学文学部講師。2017～21年9月まで大東文化大学准教授。2021年10月より現職。



周東 美材教授
学習院大学 法学部 政治学科(メディア論・文化社会学)

2015年東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻博士課程修了。東京大学大学院特任助教、日本体育大学准教授を経て2018年大東文化大学社会学部講師。2020～23年大東文化大学社会学部准教授。



松田 洋介教授
文学部 教育学科(教育社会学)

2006年一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。滋賀県立大学人間文化学部専任講師、金沢大学人間社会学域・学校教育学類 准教授を経て、2019年より現職。



春日 芳美准教授
スポーツ・健康科学部 スポーツ学科(体育・スポーツ史、文化論)

2012年早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科博士課程修了。同年4月より大東文化大学スポーツ・健康科学部専任講師等を経て2023年より現職。論文『異文化としての「身体美」—明治・大正期の女子体育と「衛生美人」、そして「翼賛美人」—にて大東文化大学創立100周年記念若手奨励賞受賞。



井上 浩子准教授
法学部 政治学科(国際関係論・東南アジア研究)

2006年東北大学大学院法学研究科博士前期課程修了。2013年オーストラリア国立大学大学院博士課程修了。この間、国連東ティモール統合ミッション選挙アドバイザー、東ティモール国立大学平和と紛争研究所客員研究員を務める。日本学術振興会特別研究員、大東文化大学専任講師などを経て、2018年より現職。

ジェンダーと身体 —「帝国」を再考する—

大東文化大学創立100周年記念研究プロジェクト「多文化共生又は社会における多様性に関する総合研究」の成果の一部として学術シンポジウムを開催しました。2023年の「帝国を再考する——コンタクトゾーンの文化とジェンダー」に続き、第2弾となる今回は海外から2名のゲストスピーカーを迎え、「ジェンダーと身体」を切り口に、広く現代社会につながる、さまざまな「帝国」の再考を試みました。

日本植民地統治前期の台湾における学校女子体育の変容

女子教育が台湾に導入されたばかりの日本統治時代は体育教育上、新旧の価値観の衝突が最も顕著だった時期といえる。当時の漢民族社会では纏足(※)が盛んで「足小ナレバ美観ナリ」とする考えが根付いていた。このため、就学条件を満たす女生徒の多くが纏足で、立つことですら困難であり、歩いたり飛び跳ねたりすることは不可能だった。

1897年4月、国語学校第一附属学校女子分教場が設立され、日本統治時代の台湾女子教育が正式に始められたが、体操科は必修教科に含まれなかった。それは女子が纏足により歩行困難で、足の痛みにより教室の隅で涙を流す者もいるなど、運動することが根本的にできなかったからであった。当時は纏足の女子に対する体育指導の経験が不足していた。

1905年に国語学校第一附属学校女子部の教諭だった藤黒総左衛門は、纏足女子の足の筋力が足りない身体的特徴に気づき、段階的なりハビリの手法で足部の効能改善を増進し、台湾女子体育の発展のために効果的な施策を大胆に試みた。また、1907年に台湾総督府国語学校助教授として着任した浜崎伝造は纏足が女子の生理的な発育に悪影響をもたらす恐れがあるとして、運動で矯正をすべきとの改善策を打ち出した。

同時期に、台湾総督府は新聞などのメディア、学校などを通じて解纏足運動を推進した。1915年には纏足を禁止、台湾女性の解纏足率は急激に上昇した。もっとも、かつてきつ縛られていた両足は、直ちに天然足の状態に回復することはなく、台日女生徒それぞれに行う授業内容や水準に相違点がみられた。とはいえ、三足(纏足、解纏足、天然足)が共存していた日本統治時代初期と比べ、状況は大幅に改善された。

「足」の変化に伴い学校女子体育は大きな転換点を迎え、台湾女性は合同体操やスウェーデン体操、遊戯、徒競走、球技、登山などにも参加するようになった。1920年代に日本で起こった「女子運動熱」は間もなく台湾に伝播し、天然足世代の女生徒は積極的に各地で行われた運動会や球技大会に参加した。1927年には「解纏足」の項目が身体測定項目から削除され、正式に纏足世代との別れを告げた。翌年には林月雲が「台中御大典記念競技会」の50メートルと100メートル競技で優勝し、台湾女性の五輪出場への道を開いた。

台湾女子にとっては、辛く困難な変化を経て心身の自由を勝ち取った歴史の歩みであるだけでなく、引きこもりの状態から自由に運動競技に参加できるようになるまでの変化を象徴したといえるが、同時に彼女たちは植民統治者が求める帝国の新女性像に当てはめられるようになったともいえる。

※纏足:幼い時から布で女性の足を緊縛して成長を妨げ、小さく特殊な形に変形させる人体改造施術。旧中国独特の奇習

金湘斌教授 台湾・高雄師範大学

金沢大学大学院人間社会環境学研究所にて博士号を取得。専門はスポーツ史、陸上競技。日本植民地下における学校の体育教育を、特に女生徒の纏足の問題に焦点を当てて研究。

20世紀後半イギリスにおけるポストコロニアル・フェミニズムとグローバルサウスの女性

本報告は、英国を代表するフェミニスト雑誌『スペアリブ』を中心に、1980年代から90年代のフェミニズム論争におけるグローバルな影響とポストコロニアル・フェミニズム(※)の中の多様性について考察する。

イラン女性、ファルザネとマニーは、1982年に『スペアリブ』誌に雇われた。人種差別に批判的な声を取り入れるためである。彼女たちは、イギリスのフェミニズムに内在した分裂や緊張関係を、黒人女性、有色人種の女性、そして「第三世界の女性」という、互いに重なり合うカテゴリーを使って分析した。イラン・イスラーム革命を取り巻く緊張を体験していた彼女たちは、「第三世界」という言葉によって、地政学的な権力構造や特定の体制に対する批判的、マルクス主義的な感覚をフェミニズムの議論に持ち込んだ。非植民地出身の彼女たちが「宗教」を分析軸とすると、同じイスラームでも植民地化されていた地域出身の読者から批判が起こるなど、一筋縄ではいかない複雑な状況がみられた。

一方エチオピア出身のツェハイは、1984年に『スペアリブ』に参加し、経済開発という問題を通して、第三世界の女性に関する問題を考察した。エリートとして生まれ、王政と社会主義革命の双方に翻弄された後に渡英したツェハイは、ポストコロニアル闘争の複雑さを強く認識していた。イギリスでレズビアンやゲイの権利、東アフリカ女性の女性器切除などの問題に触れ、「女性のための開発」を唱えるようになったが、同時に「バンドエイド」をはじめとする当時のアフリカ救援のための大規模募金活動に潜む「新植民地主義」的特質に警鐘を鳴らした。

ファルザネ、マニー、ツェハイは、1980年代末までに『スペアリブ』誌を去り、1980年代後半から1990年代にかけての同誌は、「第三世界」や「開発」という視点から遠ざかった。知的・政治的枠組みだった「第三世界」は、1990年代には「ブラック・アトランティック」という文化的視点にとって代わられた。

人権とグローバルな正義に関する批判的思考の複雑な系譜を一緒にたにすることはできない。「黒人」と「第三世界」は1980年代のフェミニズムにおいて重要な概念的資源となったが、これらの概念は常に両立しえたわけではなかった。地政学や文化的影響の文脈が変化すると、『スペアリブ』誌は黒人、反人種主義、第三世界フェミニズムに対する理解を再構築せざるをえなかったからである。私たちの課題は、「第三世界の女性」として語られる声を、「黒/白」のパターンに当てはめることを避けつつ、敬意をもって歴史化し、ポストコロニアル・フェミニズムが標榜するものについて開放的で豊かな感覚を持ち続けることである。

※ポストコロニアル・フェミニズム:人種とジェンダーの交わりに注意を払い、帝国と脱植民地化の後遺症を自己反省的に志向するフェミニズム。西欧白人男性中心主義の言説ならびにフェミニズムの言説にはらまれた権力関係を批判的に考察する実践。

ルーシー・デラップ教授 イギリス・ケンブリッジ大学

専門はイギリス近現代史。ジェンダー、フェミニズム、宗教、セクシュアリティなどをキーワードに、国際環境NGO「Friends of the Earth」とパートナーシップを組んで活動するなど、幅広く現代社会の諸問題を見据えた研究を行う。歴史学者と政策立案者やオピニオンリーダーをつなぐ『History & Policy』誌の副編集長を務める。『The Feminist Avant-Garde』(Cambridge University Press, 2007)は女性史ネットワーク賞を受賞。2018年、イギリス王立歴史協会パブリック・ヒストリー賞を受賞。



異分野の刺激を得て実りある共同研究へ

創立100周年を記念して初めて学部(領域)横断的に結成された本研究プロジェクトには、さまざまな研究分野からジェンダーや多文化共生、多様性に関心を持つ研究者が集まりました。共同研究を通し、ディシプリンを超えた共通点や思いがけないつながりが見いだされ、新たな着想につながっています。自然発生的に起こった多文化共生についての「座談会」の記録も組み込みつつ、シンポジウムをもとにした論文集を刊行予定です。今後も実りのある研究の機会が増えていくことを望みます。

山口みどり 「多文化共生又は社会における多様性に関する総合研究」研究会代表

